

平成25年度 愛知県がんセンター公開講座（第5回）のご案内

「がん研究と治療の最前線」 平成25年9月1日(日) 開催

< 講師からのメッセージ >

「ウイルスとがん ～発見の歴史と発がんへの関与～」

ヒトに癌をおこすウイルスはこれまでに7種明らかになりました。

科学技術の発展と共に、発見のされ方も進歩してきました。講演ではヒト癌ウイルスについて発見の歴史とウイルスがどのように癌を引き起こすのかその仕組みについてお話ししたいと思います。

研究所腫瘍ウイルス学部 部長 鶴見 達也

「上咽頭（のど）がんについて」

「のど」は、咽頭（いんとう）と喉頭（こうとう）からできています。このうち咽頭は鼻の奥から食道までの、食べ物と空気の両方が通る部分です。

上咽頭がんはEBウイルスががんの発生に関わっていることが知られています。中国南部や東南アジアでは発生頻度が高いです。

中咽頭がん、特に口蓋扁桃に発生するがんはヒト乳頭ウイルス（HPV）と深く関わっています。最近ではHPV陽性のがんが増加しています。

咽頭のがんの特徴は早期にリンパ節転移しやすいことと、中・下咽頭がんでは飲酒との関係から食道がんの重複が多いです。

中央病院 副院長兼頭頸部外科部長 長谷川 泰久

「大腸がん研究の現在と未来 ～基礎研究からがん治療薬の創製へ～」

2020年には、大腸がんは日本人が最も多く罹るがんになると予想されています。大腸がんは、大腸の細胞の1つに複数の遺伝子の変異が積み重なってできます。過去25年の研究から、どのような遺伝子群に変化が生じると大腸がんになるのかについて、多くのことが分かってきました。

本講演では、大腸がんがどのように生じてさらに悪性化していくのか、がんの新しい治療薬を創り出すことを目指してどのような研究が行われているのか、マウスモデルを用いた私たちの研究の紹介を含めてわかりやすくお話しさせていただきたいと思います。

研究所 分子病態学部 部長 青木 正博

「大腸がん化学療法の最近の進歩 ～何が違って何が変わらないのか～」

大腸がん化学療法は5-FU系、イリノテカン、オキサリプラチンの抗がん剤に加えて、ここ数年、分子標的治療薬が次々と承認されました。血管新生を阻害するベバシズマブ、約60%を占めるKRAS野生型大腸がんには抗EGFR抗体薬であるセツキシマブ、パニツムマブが実地臨床のなかで広く使われるようになりました。これら新規抗がん剤と分子標的治療薬導入により切除不能・進行再発大腸がんの治療成績は顕著に向上しております。大腸がん化学療法を取り巻く状況は大きく変わってきている一方で、化学療法単独で根治が得られることはほとんどないなど、以前と変わらないことも多々あります。大腸がん化学療法の「今」をお話ししたいと思います。

中央病院 薬物療法部 部長/外来化学療法センター長 室 圭